強制幼児化施設―前編―サンプル

「っおい！　放せよ！」
「静かにしなさい」
「放せってば！　お前なんなんだよ！」
バイトからの帰り道、突然連れ込まれたワンボックスの中。後部座席が取り外された広い車内で、屈強な二人の男が洋介の四肢を押さえつけていた。
「鏑木《かぶらぎ》洋介。お前は今から俺のものだ」
「はぁっ？」
車内にいるのは計五人。洋介と運転手、それから手足を押さえつけている二人とそしてこの冷静な男。
拉致犯にしては落ち着いている。それともこういうことに慣れているのだろうか。
にしても一体どうしてこんな目に遭わないといけないのだ。家は貧しくも裕福でもない。外見は派手だがヤンキーやヤクザと喧嘩になったこともない。金狙いにしても復讐にしてもどちらも心当たりは一つもなかった。
（しかも、俺のものって言った……？）
俺のもの、とはどういう意味なのか。全く理解できないし、力ずくで押さえられた手足も痛い。いつの間にか車も走り出していて、現在地なんてもう見当もつかない。
「……放せよ」
「……逃げられないのは分かっているな」
「走ってる車から飛び降りたりはしねえよ」
ちらりと窓の外を窺い見る。店の明かりが見えない。対向車も見えない。ということはきっと高速に乗っているのだろう。
「……放してやれ」
男の一声で手足が一気に楽になった。血が巡っていく感じさえする。手首を振って強張りをほぐす。
「なぁ、何で俺なんだよ。人違いだと思うんだけど」
「鏑木洋介だろう」
暗くて顔はよく見えないが、声から察するに年寄りではないようだ。三十代か、ぎりぎり四十代か。服はスーツ。乱れもなく、ネクタイもきちんと襟元に接している。一見まじめな銀行員――インテリ系。こんな拉致なんてする輩には見えない。
「そうだけど……ほら、同姓同名とか」
言いながら、それはないだろうなと自分でも思う。もし苗字が田中とか鈴木なら有り得たかもしれないが、さすがに鏑木では難しい。
「あぁ、もし同姓同名の人違いだったとしても俺はお前を気に入ったよ」
こんな強引なことをしているくせに男の声は少し楽しそうに聞こえる。緊張感は微塵も感じない。こんなことして捕まるかもしれないなんて考えないのだろうか。
「……どういう意味だよ。っていうか、何で拉致？　俺の家には金なんてないよ」

「目的は金じゃない。というか、そもそもこれは拉致じゃない」
「いやどう考えても拉致だろ」
バイトからの帰り道、時刻は二十三時半。歩道を歩いているときに突然名前を呼ばれて振り返った瞬間腕を引かれてあっという間に気付けば車内。これのどこが拉致でないというのか。
「俺はお前を知っている。だから声を掛けて車に乗せた」
「で？　今から家まで送ってくれるって？」
もうやけくそだった。少なくとも危害を加えられそうな雰囲気はないし、腕っ節の強そうな男たちは二人ともこのインテリに御されているように見えた。
「あぁ、もちろん。まぁお前の家は今日から俺の家だが」
頭がオカシイ。そうとしか思えない。頭が良さそうなのは外見だけで、中身はちょっと残念なタイプなのだろう。たまにいる、悪い奴じゃないけど日本語は通じないタイプ。
「……そもそも俺はあんたを知らないんだけど。どうして俺のこと知ってるわけ？　こんな拉致までして」
「だから拉致ではないと言っているだろう」
「立派な拉致だって！　つか、捕まるぞ！」
「捕まらない。拉致じゃないからな。それにお前はもう二十歳だろう？　周りも家出したと思うさ」
「ちげえ！　そんなこと絶対ない！」
「……どうしてそう思う？　髪もこんなに痛むまで染めて」
「触んな！」
インテリが髪に触れた。その手を思いきり払いのける。しかしその瞬間横に控えていた男二人にまた強引に身体を捩じ伏せられてしまった。
「っく……」
首が痛い。後ろ手に回された手首も肩も痛い。拘束から逃げようとしてもピクリとも動かない。
（こいつら格闘技やってるやつか？）
「……綺麗な顔に穴まで開けて」
男が頬に触れた。そして親指が触れるか触れないかのタッチで唇をなぞる。
「キスのとき、邪魔そうだな」
「触んな！」
「いや、それとも感じやすくなるのか？」
その声と手に感じたのは、なぜか恐怖ではなく色気だった。ものすごい色気。大人の穏やかな、けれど隠された熱いほどの欲を見せつけられた気がした。
ぞくりと腰が震える。でもどうしてこいつ相手にそんな思いをするのかが分からない。それにこの男がどうして急に色気を出してきたのかも。
「……やめろ……」
小さな声しか出なかった。きっと本能が勝てないと判断したのだ。肉体的な力を見せつけてくるこの二人の男より、楽しそうに、そして静かに話すだけの男の方が強いと認識している。
「……可愛いな。素質がありそうだ」

その言葉で分かった。こいつはゲイだ。もしかしたら、いやきっと洋介をそういう対象として見ている。
「おい、」
「洋介」
インテリが遮るように呼んだ。そして同時に洋介を押さえている男たちに視線をやる。すると身体が解放された。けれどさっきより腕が痛い。
「お前は家も社会も嫌だったんじゃないのか」
さっきまでの恐ろしいほどの色気はもうない。大人になると色気さえも自由自在なのか。しかし何を考えているのか全く理解することができない。こいつは一体何を知っているのか。
「……うるせぇよ……」
「さっきまでの威勢はどうした？　急に可愛くなったな」
「……うるさい」
こいつにとっては洋介がどんなに騒ごうと子犬がキャンキャン吠えている程度にしか見えないのだ。きっと噛んだって笑って許すに違いない。
「……大丈夫、俺が可愛がってやる」
「は？」
話が飛び飛びだ。何から何まで意味がわからない。
「お前、女を抱いたことはあるか」
「……ねえわけねえだろ」
でも一度だけだ。それも緊張であまり覚えていない。でも「ない」と言えばこの男の思うつぼな気がして虚勢を張った。きっと虚勢だということも見破られているのだろうけれど。
そう思ったのに、男は視線を鋭くさせた。
「ほう……お前が可愛がったのか？　それとも可愛がられたのか？」
「はあ？」
可愛がられるって何だ。男ならそれなりに女を可愛がりながら抱くものじゃないのか。
（まぁ、そんな余裕なかったけど……）
過去唯一の女との経験。相手はバイト先の先輩の彼女だった。バイト先に、先輩に会いに来ているうちに自然と洋介も話すようになって、それで――。
「洋介」
「あ……」
「女を思い出してるのか？　俺といるときに他の奴のことを考えるのは許さない」
「……あんた、何言って」
「洋介」
有無を言わさぬ声だった。従うしかないと本能が告げる。命の危険を感じているわけでもないのに。
「……洋介。可愛がられて、とろけるまで甘やかされながら、ただ自分が気持ちよくなるだけのセックスをしてみたいとは思わないか？」
「……なに……」

この男は一体何を言っているのだろう。おかしい。そう思うのに気になってしまう。とろけるような、甘やかされるだけの気持ちいいセックスが。

「相手のことなんて気にすることなく、ただ自分だけが気持ちいいセックスをしてみたくないかと訊いているんだ」

そんなセックス、聞いたことがない。

一度しか経験のないセックスはほとんど覚えていないけれど、とにかく気を遣ってばかりだったように思う。痛くないか、演技をしていないか。それから初めて見た本物のまんこに興奮してじっとりと観察してしまっていたように思う。そんな風に挿入前のことばかり覚えていて、実際、自分のちんこを挿入した後のことは全く覚えていない。初めて感じる女の中は一体どんな風だったのか。どんな風に腰を振ったのか――しっかり振れていたのか。

「何も考えなくていい。動く必要もない。ただ柔らかいベッドの上に寝転んで、あとは気持ちいい思いをしているだけでいい」

男の声はまるで催眠術のようだった。言葉がすっと脳に入ってきて、そして映像化する。ラブホのような広いベッドに寝転んで、気持ちよくなる――けれど経験が浅すぎて具体的な行為は何一つ浮かばない。

でもなぜかそこにいたのはおっぱいの大きな女の子ではなく、気持ちよくて馬鹿になりそうな洋介を優しく見つめるこの男の姿だった。

「……何かのクスリかよ」

自分の想像をかき消すように低い声を選ぶ。

とろける風に、なんてありえないだろう。それにこんなにもストレートに言葉が入ってくるのもおかしい。まさかこの車内にも薬が焚かれていたりするのだろうか。

けれど男は吹き出すように笑った。けれど馬鹿にしたような笑いではない。目は先ほどよりも優しくなっているくらいだった。

「そんなものは使わないよ。身体は健康なままだ。変なクスリなんかで大切なお前の身体を傷付けるつもりはない」

〜〜〜〜

「……俺はここで何をしたらいいの？」

「何もしなくていい」

「……何のために拉致したの」

タメロを利いても逆らっても怒らない。

「大切だからだ」

「でも俺はあんたを知らないよ」

ストーカーだったのだろうか。気付かなかっただけで、いつからかこいつにストーカーされていて、ついに拉致された、ということだろうか。

「……まぁ、そうかもしれないな」

「俺があんたを知らないってことは、あんたが俺について知っているのはせいぜい外見くらいだろ。内面を知ってもう幻滅してんじゃねぇの」
顔は可愛いと言われるタイプだけれど、口は悪いし頭も馬鹿だ。綺麗めな服を着て大人しく座っていれば声を掛けられることもあるけれど、性格を知る友人たちには詐欺師呼ばわりされている。
だからこれでもう帰してもらえるんじゃないかと思ったのだ。セックスは魅力的だけれど、この男と生活する理由はない。それにここがどこだか分からないし友達に会えないのだって嫌だ。
なのに男はおかしそうに笑った。
「そんなことはないよ。むしろ好みだ」
「……なぁその好みって……」
滝口はゲイなのか。だからこうして口説いてきているのか。やはりストーカーなのかもしれない。
「恋愛的に、だよ。けれど今すぐ何かしようとは思っていない。一方的にどうこうしようとも思っていない」
言っていることとやっていることがハチャメチャだ。何が「一方的にどうこうしようとは思っていない」だ。拉致している時点で一方的にどうこうしている。
「……一方的じゃん」
「何が」
「拉致」
「拉致じゃないよ」
「……なら、何。何の犯罪なの」
車内での男の台詞を思い出す。
『犯罪……か。拉致ではないが確かに犯罪かもしれんな』
男は確かにそう言っていた。拉致ではないが、犯罪。けれどそれを教えてはくれない。
「……身体が冷える」
もう何度目の誤魔化しか。むしろこの分かりやすい話の変え方は「訊くな」と言外に伝えようとしているのか。でもそれならなぜそう言わないのだろう。
洋介とてこのままではいられない。幸い危害を加えられそうにはないし、滝口の言う通り時間ももう遅いから一晩くらいと思ってはいるがそれを何日も続ける気は毛頭ない。
「……寒くねえよ」
「寒いよ」
そう言うが、洗面所にさえエアコンが効いている。きっとこの屋敷ではどこでも常春なのだろう。
「おいで」
男は強引だった。風呂に連れ込まれたという意味じゃない。会話を強引に終わらせたのだ。
「……ほら」
シャツもズボンも乱雑に脱がされた。けれどそんな動作この男には似合わない。
（焦ってる……？）
でも何に。

訊くこともできないまま簡単に全裸にされて、でも身体をじろじろ見ることもなく滝口自身も服を脱ぎ始めた。
なんか変だ。もし身体が目当てなのならもっと見てきそうなものなのに。まるで身体には興味がなさそうに見える。
「ほらおいで」
広い浴室。洗い場も浴槽も広い。それに何だかいい匂いがしている。
「何の匂い？」
「入浴剤だよ。ミルクだろう」
この男がミルクの入浴剤。似合わなすぎる。そう思ったのがどうやら顔に出ていたらしい。男は苦笑して言った。
「初めて一緒に風呂に入るのに緊張するかと思ったんだ」
「緊張って……」
緊張よりも謎解きの方に意識が向いていた。それにこれだけ広いと小さめの銭湯というか、温泉に入りに来た気分。男同士だし、あまり気にならない。
「甘すぎたかな」
「いや、いい匂いだと思う」
柔らかい匂いだ。浴槽に近付いてみると確かに色は白く濁っていて底は見えない。これなら一緒に入っても身体が透けて見えることはないだろう。
「なぁ」
「ん？」
「……なんでもない」
男はそうか、と笑った。そして椅子に座らされる。
「ゆっくりしていろ」
まさか本当に洗ってくれる気なのか。どうせなら女の子がいい。
「自分でするよ」
「何もしなくていいと言っただろう。ほら、頭を濡らすぞ」

〜〜〜〜

「気を付けて」
「……なぁ。マジで何なの？」
逃げ出すなら施設に送られるタイミングだろうと思っていたのに、その気持ちさえ読んでいたのか警備は厳重だった。どうやっても逃げ出せそうにない。左手は昨日の屈強な男と手錠で繋がれ、そして反対側にも別の男が立っている。
「仕事が落ち着いたら会いに行くよ」

「別に会いたいなんて思ってねえよ」
他の男がいるからか、滝口の口調は硬かった。それでも昨日の夜――お風呂の後に髪を乾かしてくれる優しい手だとか、眠るときの包み込む体温だとか――を思い出すと怖くはない。
「連れて行け」
一言。たったそれだけで周りにいた数人の男が動き出す。手錠で洋介と繋がっている男も、だ。
「おいっ！」
「洋介、身体を壊すなよ」
どこに連れていかれるのか。やはりこいつはヤクザか何かだったのか。行先はどこなのか。何をさせられるのか。
（警察っ！）
マジでここから動いたら警察に追ってもらえなくなるかもしれない。マジでやばい。
少なくとも滝口は危害を加えてくる気配がなかったから安堵していたのに、行った先ではどうなるか分からない。やばい。逃げないと。
けれどどうやっても逃げられないまま車に乗せられ、下ろされたときには全く知らない場所にいた。

「初めまして」
可愛らしい男、というのが第一印象。年はいくつか上だろう。優しい可愛らしいお兄さん、という風貌。女装が似合いそう。
「私は充です。みつる先生と呼んでください」
充は水色のエプロンをしていた。真ん中にはゾウの絵。見るからに保育士。
「ここはどこなんだよ」
屈強な男たちは洋介をこの部屋――十五畳ほどの何もない部屋――に洋介を入れると無言で立ち去って行った。ドアが閉まった瞬間全ての音が消え、ここが防音室だと知った。
「ここは幼児化施設です」
「よう……用事か施設？」
「幼児化……つまり赤ちゃん返りをするところです」
「……は？」
一体何を言っているんだ。というか、これは夢なのかもしれない。バイト帰りに事故に遭って夢を見ている。夢の中で拉致され、一晩甘やかされて過ごし、そして訳の分からない施設に――いや夢でも突拍子がなさすぎる。保育園なんて普段意識したことすらない。そんなものが夢に出てくるとは思えない。
「洋介くんの保護者、滝口様からご依頼を受けています。洋介くんが可愛い赤ちゃんになるようにと」
「……意味分かんないんだけど」
「大丈夫、ちゃんと可愛い赤ちゃんになれますよ」
（こいつも話が通じない……！）
「まずは今日はゆっくり過ごしてくださいね。突然連れて来られて驚かれたでしょう」
「……俺、マジで意味分かんないんだけど」

「えぇ、そうでしょう。けれど大丈夫です。意味を分かりたいとも思わなくなれますよ」
宗教か何かなのか。どうしてこうも話が通じないのか。一体何をしようとしているのか。
「ここは洋介くんのお部屋です。これから数か月……洋介くんが可愛い赤ちゃんになれるまでここで生活してもらいます」
「……何もないんだけど」
「はい。これから少しずつ、洋介くんの好みに合わせて物を増やしていきます」
それならいい。いや、いいというか、退屈さえ凌げれば。どうせいつかは警察がここに踏み込んでくるはずだから。
「何か用があったら部屋の奥の壁にあるボタンを押してください」
充と名乗った男はそう言って部屋から出て行った。
（え？！）
男が出て行ったドアにはノブがなかった。一体どうやって出て行ったのか。ドアに張り付いて見ると、どうやらさっきは充の身体で隠れていた部分に小さな機械がついていた。
（指紋認証？）
カードを通すスリットや鍵穴は見当たらない。となると恐らくタッチタイプの鍵か指紋か……どちらにしても簡単には逃げられそうになかった。
ドアからの脱出は一度置いておき、一人になった部屋を改めて見回してみる。けれどやはり、本当に何もなかった。
天井にはシーリングライト。けれど壁を見てもスイッチらしきものはない。かといってリモコンもない。
（エアコン……はあるな。あとは壁のボタン……呼び出し用か）
壁伝いに部屋を一周しても、驚くほど何もなかった。窓は一つ。けれど腰の高さの窓で開閉は隙間が開くだけのタイプ。外を見ても見えるのは木だけ。山の中にあるのかもしれない。そういえば車は山道を登っていたような気もする。
この部屋の高さは恐らく三階以上だろう。ここからは出られそうにない。一先ず外から視線を外す。
呼び出し用のボタンはなぜか床から十センチのところにあった。しゃがんでボタンを押してみる。けれど何も鳴らない。インターフォンのようにマイクもない。
一体何なのか。壊れているのだろうか。
床には組み合わせ式のプレイマットが敷かれていて柔らかい。数枚剥がしてみると、その下はリノリウムだった。まるで病院のよう。
（ここは病院なのか？）
考えても分からない。幼児化施設とは一体何なのか。どこかの研究機関とか、実験用の何かなのか。
部屋をもう一度見回してみる。
本当に何もない。テーブルも冷蔵庫も、ベッドもなければテレビもない。
（つか、トイレは？）
何もない。流し台一つない。出られるのか？　と思ってドアの前に立ってみて機械に触れてみたが何も起こらない。

どうしたものか、と思っているとドアが勝手に開いた。
「わっ！」
「あ、すみません、そこにいたんですね。どうかしましたか？」
「え？」
「呼び出しボタンを押したでしょう」
「あ……」
そうだった。そういえばボタンを押したんだった。けれど何も起きなかったから故障しているのかと思っていた。
「や……あ、そうだ、その、トイレとかどうしたらいいの？」
まずは油断させよう。今はきっと相手も警戒しているはずだ。
「あぁ、必要ありませんよ。もうトイレに行きたいですか」
「や、そういうわけじゃ……」
別に催していたわけではない。けれど意識してしまったら何となく行きたくなってしまった。
「……でもやっぱり今のうちに行っておこうかな」
「ではオムツをしましょうか。寝転んでください」
「は？」
「オムツです。赤ちゃんはトイレを使いませんよ」
（……頭が真っ白なんだけど……）
驚くほど意味が分からない。赤ちゃん返りする施設と確かにさっき言っていたけれど、まさかそんなことをリアルにするつもりなのか。
「トイレはありません。ドアからも窓からも一切出ることはできません。排泄はオムツだけです。食事は時間になったら運んできます」
「……意味分かんねえよ」

〜〜〜〜

「おしっこは？」
「……したいけど……」
「恥ずかしくないよ。排泄はみんなすることだから大丈夫」
充は食器を下げるとまたすぐに部屋に戻って来てくれた。そしてちゃんと排泄欲求があることを分かってくれていた。
「やだよ、だって」
オムツに排泄なんて。立ちションは見られても恥ずかしくないのに、オムツにするのは恥ずかしい。出しているところを見られるわけでもないのに。
「……じゃあ抱っこでしてみようか」

「え？」
「抱っこ。それならしているときの顔も見えないから。それとも部屋から出ているから、その間にする？」
「……自分で替える」
トイレも風呂も使わせてもらえないのならそれが一番マシな方法だった。けれど――。
「それはダメ。オムツは絶対に僕がしないと」
「……でも」
「ね、大丈夫だから。しーしてごらん」
急に強くなった子供扱い。恥ずかしい。
「……ほら、膀胱炎になっちゃうよ」
「それは……」
それは避けたい。何度もこまめに排泄するなんて嫌だ。
「大丈夫。ほら抱っこしてみよう」
呼ばれるかと思いきや、充の方から目の前に来た。そして足を伸ばして座る。
「おいで」
そして太ももをぽんぽんと叩く。年上とはいえ自分より華奢で可愛らしい顔立ちの男の膝に乗って甘えるなんて。
（でもっ……）
尿意は限界だ。出したい。楽になりたい。
（それに、もう見られてるし……）
お漏らしだって見られているし、今しているオムツだって充がしてくれたものだ。それに充は仕事でしているだけ。看護師とか介護士とか、そういうのと変わらないだろう。洋介だってもし事故にでも遭って怪我でもすればそういうお世話になることだってあるかもしれないのだ。それと同じ。そう思っていればいい。
「ん……」
小さく頷いて、それから充の太ももに乗る。細い。折れそうだ。体重がかからないように膝立ちで跨ぐ。
「いいこ。ほらおいで」
近くにいるじゃないか、そう思ったけれど充の「おいで」はハグのことだったらしい。背中に腕を回され、頭を肩に引き寄せられる。
「しーしようね。恥ずかしくないよ。怖くない。大丈夫だからゆっくり身体から力を抜いて」
薄い肩に額をあてて目を閉じる。
「しー、だよ。洋介くんにならできるよ。大丈夫」
優しいゆったりとした声だ。それにつられるようにして身体から力が抜けていく。
「ぁ……」
「出そう？」
「ん、出る……あ、嘘……」
やばい、本当に出る。

「ダメだよ、止めないで」
「や、でもっ」
思わず身体に力が入った途端、充が腕に力を込めた。
「大丈夫だから、ね。大丈夫、洋介くんはちゃんとおしっこできるよ」
「ん……」
（おしっこ……）
出してもいいのだ。このまま、充の膝の上で。
「ぁ……」
出していい、自分でそう思った途端しょろしょろと尿が漏れ出した。気持ちいい。少しずつ勢いが増して、お腹が軽くなっていく。
「可愛い。ちゃんと出せて偉いね」
「や……」
可愛いなんて。男のオムツ排泄なんて見て何が可愛いのか。でも少なくとも「汚い」と言われるよりはオムツ排泄への罪悪感が減る。
「全部出しちゃおうね」
「ン……」
かなり長い時間我慢していたせいで尿は全く止まらない。勢いも衰えない。だんだん不安になってくる。
「ね、大丈夫？」
「ん？」
「漏れない？」
「大丈夫……でもオムツ漏れしてもいいんだよ。ちゃんとお世話してあげるから」
「……いいの？」
お漏らしという弱点というか、秘密を握られてしまったような気持ちだからなのだろうか。それとも殴ってしまったのに怒らないでくれたことへの負い目なのか、充に強く出られない。
「うん、いいよ。可愛い。そんなこと不安に思わなくていいんだよ」
オムツ漏れは『そんなこと』なのか。そんな風でいいのか。
「ん……あ、終わった」
「すっきりした？　もう出ない？」
「出ない……」
排泄している間は快感があった。はっきり言ってすごく気持ち良かった。けれどこうして終わってみると冷静になった自分がいる。恥ずかしい。まるで賢者タイムだ。
「じゃあお尻を綺麗にしようね。あ、うんちはどうかな」